

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	京都造形芸術大学舞台芸術研究センター	
施 設 名	京都芸術劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業	
内定額(総額)	19,257	(千円)
公演事業	17,698	(千円)
人材養成事業	1,559	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	「京舞と狂言」	令和1年5月25日	演目：『三国一』『鉄輪』『因幡堂』 出演：井上安寿子、茂山忠三郎 他	目標値	420
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	446
2	ウィリアム・ケントリッジ 演出『冬の旅』	令和1年10月18日	出演：マティアス・ゲルネ(バリトン)、 マルクス・ヒンターホイザー(ピアノ)	目標値	800
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	747
3	KUNIO15『グリークス』	令和1年11月10日	出演：天宮良 安藤玉恵、本多麻紀、武田 暁、石村みか、箱田暁史、田中佑弥 他	目標値	500
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	349
4	木ノ下歌舞伎『娘道成寺』	令和1年12月7・8日	演出・振付・出演：きたまり	目標値	370
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	358
5	「春秋座 能と狂言」	令和2年2月11日	出演：観世鍊之丞、野村万作、野村萬斎、 片山九郎右衛門、亀井広忠 他	目標値	620
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	572
6	シャンカル・ヴェンカテージ ユワラン演出『インディアン・ ロープ・トリック』	令和2年2月22・23日	出演：チャンドラ・ニーナサム、アニル ドウ・ナーヤル 他	目標値	340
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	180
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>以下のミッションや地域の特性に基づき、当初の予定通り事業を進めることができた。</p> <p>■本劇場のミッション 本劇場は、私立系芸術大学内にある「大学の劇場」として、本学の建学理念である「芸術立国」、「京都文藝復興」を実現するための拠点として、〈教育機能〉、〈研究機能〉、〈社会貢献機能〉の3点をその存在意義としている。また、「地域の中核劇場」として、「《世界》を《京都》へ」、「《京都》から《世界》へ」、「学術的・実践的なネットワークの形成・更新」の三本柱を社会的役割（ミッション）としている。これらの方針に基づき、事業を組み立て、予定通りプログラムを開催した。</p> <p>■ミッションに基づいた事業展開 1つ目のミッション「《世界》を《京都》へ」として、国内外の先端的な作品を幅広く紹介（公演事業2、3、5、6）。2つ目のミッション「《京都》から《世界》へ」として、地域が育んだ豊かな芸術文化の土壌を基盤とする舞台芸術作品を創造・発信した（公演事業1、4）。3つ目のミッション「学術的・実践的なネットワークの形成・更新」として、各事業において他機関との協力体制を築き、今後の上演を視野に入れた海外アーティストの創作滞在を目指し他地域での芸術団体との協力関係をスタートさせた。人材養成事業では、アーティストと地域住民、本学学生の協同による作品創作を実施。地域住民と本学学生を中心とした公演鑑賞後の感想シェア会も定期的におこなった。</p> <p>■地域の特色をふまえた活動 京都・関西圏が、豊かな伝統文化及び小劇場演劇・ダンス文化を育んできた地域であることをふまえ、上記の取組以外にも、伝統芸能に関わる多彩な講義・プログラム、小劇場を拠点に活動するアーティストによる研究会・ワークショップを開催した。平成22年度から続く京都国際舞台芸術祭では実行委員会の構成組織として初年度から参加しており、地域の関連団体と協働関係を築いている。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>以下のことから、助成に値する意義が継続して認められる。</p> <p>■学びの場としての劇場 本劇場は「大学の劇場」として、本学学生が劇場運営にかかわっていることも特徴の一つである。具体的には、公演時のフロントスタッフや、舞台裏のステージスタッフは、劇場スタッフによる研修・避難訓練を受けた本学学生がかかわっている。また、公演によっては、本学舞台芸術学科等で専門的な知識を学んだ学生が、舞台・音響・照明スタッフのアシスタントとして現場に参加しており、プロによる創作の現場を間近で体験できる機会となっている。</p> <p>■地域住民の鑑賞活動および文化芸術活動の拡大に資する取り組み 平成14年から18年続いている公開連続講座「日本芸能史」では、本学学生のほか一般受講生も各期約200名が登録し、本劇場春秋座を会場に、実演家や研究者による授業を前後期あわせて年間計28回開催している。この連続講座はときに自主事業と連携し、出演アーティストを講師として招き、公演鑑賞の手引きとなるよう工夫をおこなっている。また、平成31年度より人材養成事業として「ゆるくつながるクラブ活動」を開始。これは、観客、公演参加アーティストが、客席／舞台という立ち位置を離れて、双方が自由な意見交換を行うことで、参加者全員にとってそれぞれの視点や思考を知ることが目的としている。一過性ではなく継続して本劇場の活動に関わってもらえるよう、自主事業公演に関連した感想シェア会を連続して実施した。観客によってはこのクラブ活動への参加を目的に、以前には関心を払わなかった舞台作品をみることにつながった。また、ステークホルダーからのニーズや実態の把握を目的として、本学アートプロデュース（ASP）学科による本劇場を対象としたリサーチプロジェクトが行われた。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

公演事業、人材養成事業とも、本劇場の特徴である「大学の劇場」として、各目標を設定し以下の効果を測定した。

■公演事業 (1) 妥当性にあげたミッションのもと、以下の2つの目標を掲げた

①舞台芸術の「歴史」や豊かな「伝統」の価値を実践的に見直しつつ、同時にまた、舞台芸術の「未来」を見据えた新しい作品の創造と発信を行うこと。

②「芸術を通じた地域社会への貢献」という理念のもと、作品創造が、「京都」の観客を育み、「京都」のアーティストを触発する刺激的な「受容の場」を、たえず新たに創出していくこと。

これらを計る指標として、モニター制度や来場者へのアンケートやヒアリングを行った。モニター制度による外部識者からの意見では、対象の公演だけではなく、公開講座やトーク等の関連イベントもふくめた当舞台芸術研究センター全体の取り組みに対しての評価があった。各舞台芸術の歴史や地域性をふくめた背景や、各アーティストの取り組みなど、多角的に紹介することが、観客の作品への関心を一層深めることにつながられることを実感した。

■人材養成事業 アーティスト、地域の方々と本学の学生が関わる形で関連のワークショップを行うことで地域文化の振興を図り舞台芸術に係る人材を養成することを目標に掲げた。その効果測定には、アーティスト・学生・一般参加者数、来場者数、周知活動における数値目標を設定したほか（各目標は達成した）、参加者へのタイミングをわけた複数回実施アンケートによる計測をおこなった。

また、(1) 妥当性でもふれたように、本学 ASP 学科によるリサーチプロジェクト（「わたしたちがみた芸術と文化の現在 2019」）では教員・学生の協力のもと、人材養成事業の効果を測定できた。これにより、目標評価項目である「舞台芸術にふれる機会の増加」「舞台芸術に関する関心の向上」「自己表現と他者との関わりに対する欲求」「創造性・コミュニケーション能力・感性の発揮」「世代の違う参加者との共同作業による効果」「企画参加による心身の健康増進」「コミュニティ創造への期待と結果」について、概ね前向きな効果が現れていたことがわかった。また、同学科の教員より指導をうけた学生がモデレーターをつとめる公演後の感想シェア会では、劇場をプラットフォームとしたコミュニティの創造と維持が図られた。なお、本企画は令和2年度以降も継続予定である。

なお、公演事業・人材養成事業とも、アンケート回収率に関しては、目標の数値に達成しなかったことが今後の課題として挙げられる。公演や観客によっては感想をまとめるのに時間が必要なものもあるため、一概に回収率等数値だけでは測れないものもある。公演の反応や劇場への要望を計る手段として、今後はアンケート回収率アップにむけた努力も行いつつ、「ゆるくつながるクラブ活動」内の感想シェア会も大いに活用していきたい。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

■**事業期間** 公演事業・人材養成事業とも、概ね当初の計画通りの日程・公演回数で実施することができた。

なお、人材養成事業3においては、感想シェア会の他に当初は演技・ダンスなどの身体的なワークショップを行う予定をしていたが、内容をレクチャーワークショップに変更した。これは事前の参加希望者へのヒアリングで要望があったため、本クラブ活動の趣旨を理解すること、また、参加する意義の浸透を図ることにもつながり、今後の継続的な活動をスムーズに進めるため有効であった。

■**事業費** 公演事業2・3において、当初の計画よりも支出額に乖離が生じた。理由としては、高額機材レンタルにおいて、レンタル業者の協力が得られたこと、原語上演にあたり日本語・英語の翻訳費において、既存のテキスト使用が認められたことがあげられる。

チケット収入においては令和2年2月に開催した公演事業5・6において、当初の見込みを割ることになった。その理由として、ひとつは新型コロナウイルス感染拡大防止のため、公演は実施できたものの、観客が自主的に外出を控えたことが考えられる。また、もう一つは、海外アーティストの世界初演作品であったため、レビューの活用やビジュアルイメージをもったの宣伝が強く打ち出せなかったことがある。地域において知名度が十分ではないアーティストでも、公演事業の目標でもある、舞台芸術の「未来」を見据えた新しい作品の創造と発信、そして、地域のアーティストを触発する刺激的な「受容の場」としての劇場を目指す上で、これらのアーティストの作品上演を、目標動員数を達しながら確実にこなっていくことは重要である。地域の観客、学生、アーティストにむけていかに告知をおこなっていくかが今後の課題である。

また、「大学の劇場」として、本学学生ならびに他大学学生等ユース層の動員に力をいれており、学生・ユース(25歳以下)の割引を全事業で導入しているが、公演によっては来場者全体における学生ユース層の割合に大きな差がでている。ひろく舞台芸術全般への関心を喚起するよう広報の手段、内容ともに充実させていきたい。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

以下の視点において、地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮したといえる。

■「大学の劇場」としての特色、及びそれに基づく成果 (1) 妥当性にあげたミッションのもと、本劇場は、芸術系大学である本学教員（＝アーティスト、批評家・研究者）及び外部有識者で構成される運営会議によって、企画・運営がなされている。その結果、創造現場と研究・教育現場を結ぶ多様なネットワークが構築されている。

■伝統から現代まで、幅広い作品に適した劇場空間 歌舞伎劇場である春秋座は、通常の客席を用いた使用方法だけでなく、舞台上に仮設客席を組み作品にあわせた劇場空間を作り上げることが可能である。仮設客席は演出家をはじめとする外部スタッフと当劇場技術チームが協力し、作品ごとに異なる、理想の空間形成を追求している。

■各公演事業、人材養成事業の特色

公演事業1「京舞と狂言」では本学卒業生でもある井上安寿子（京舞次期後継者）・茂山忠三郎（狂言大蔵流茂山忠三郎家当主）の次世代を担う若手による比較上演を開催。この二つの芸能の比較上演は初めての試みであり、なお次年度は第二弾で更なる挑戦として合同創作演目を披露する予定である。

公演事業2 ウィリアム・ケントリッジ演出『冬の旅』は Kyoto Experiment 京都国際舞台芸術祭のプログラムとして上演した。京都単独での開催で、芸術祭のプログラム・ディレクターや事務局と密に連携しつつカンパニーやアーティストとは直接交渉し、契約書をはじめとする連絡業務やテクニカル等の手配を行った。

公演事業3 KUNIO15 『グリークス』は杉原邦生（本学卒業生）による、上演時間10時間におよぶ意欲的な超大作で、これまで本劇場で実施した長時間上演作品の経験を活かし、カンパニーの受け入れや観客対応を行った。

公演事業4 木ノ下歌舞伎『娘道成寺』は、今回はじめて長唄・囃子の生演奏による上演で、古典芸能とのネットワークを持つ本劇場ならではの取り組みだった。主宰の木ノ下裕一（本学卒業生）による「道成寺」をテーマに3回の連続公開講座も開催した。

公演事業5 春秋座 能と狂言は、11回目を迎える人気企画で、歌舞伎劇場の花道を橋掛かりとして使用し、照明デザイナーの意匠をくわえた演出で上演した。研究者・演者によるプレトークを実施したほか、能の詞章・現代語訳を劇場ウェブサイトに掲載し、当日パンフレットとしても配布した。

公演事業6 『インディアン・ロープ・トリック』はインドの演出家シャンカル・ヴェンカテシュワランと当劇場と東京・シアターコモンズによる共同製作として創作し、京都が世界初演であった。本作は今後世界の他都市で上演の可能性があり、今回の日本公演でも高い評価を得ているが、今後の深化が期待される作品である。

人材養成事業1 マームとジプシー『めにみえない みみにしたい』4歳から大人まで一緒に楽しめる作品として、次代の演劇界を担う藤田貴大による作・演出で上演。当日はロビーに子供向けの展示も行った。

人材養成事業2 藤田貴大ワークショップ公演『madogiwa』当劇場が継続して開催する一般参加型企画で、『めにみえない みみにしたい』につづき藤田貴大作・演出で上演。地域の方々とアーティスト、学生が世代を超えて交流し刺激しあう場を創出した。予想を大きく上回る参加応募があり、当初予定の規模を拡大して実施した。

人材養成事業3 春秋座ワークショップクラブ「ゆるくつながるクラブ活動」では、一般の方々、アーティスト、学生が参加。ワークショップや感想シェア会を通して劇場を中心としたコミュニティの継続・拡大を図った。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

以下の視点において、地域の文化芸術の発展につなげることができた。

■地域とのネットワークによる成果

本劇場（＝舞台芸術研究センター）は、平成 22 年から開催されている京都国際舞台芸術祭に初年度から協力体制を築いており、平成 25 年度より実行委員長は当舞台芸術研究センター主任研究員の森山直人が務めている。その京都国際舞台芸術祭との協力のもと、前項であげた公演事業 2 が実現し、京都単独の公演とあって、地域はもちろん、国内他地域や海外からの来場者もあった。

■多様な情報発信

事業を通じた本劇場の取り組みは、年間プログラムを掲載したリーフレット（年 1 回発行）、対象期間の公演に焦点をあてた劇場ニュースレター（年 3 回発行）、ウェブサイト・SNS（随時更新）にて情報発信を行った。また、当舞台芸術研究センターでは、舞台芸術の新たな可能性を考察する書籍として機関誌『舞台芸術』を毎年発行しており、平成 31 年度は 23 号（特集：ドラマトゥルクの未来）として、当劇場主催事業に関する記録のほか、本学内外の研究者・アーティストによるテーマに即した論考を掲載した。

このほか、各事業の取り組みは新聞記事やウェブマガジンなどのメディアに多く取り上げられ、研究者や専門家によるレビューも多数掲載された。

■実験の場としての劇場の活用

本劇場（＝舞台芸術研究センター）は、平成 25 年度より文部科学省から共同利用・共同研究拠点（舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点）として認定を受けている。本研究拠点の特色は、アーティストと研究者とが共同でプロジェクトを立ち上げ、「劇場を活用した研究」という独自の研究手法を通して、舞台芸術の創造と受容に関するさまざまなテーマに基づく研究活動を行うことである。当舞台芸術研究センターのアーティストや研究者が中心となっておこなう事業と、公募により選ばれたチーム（毎年 2～3 組）でおこなう事業があり、舞台芸術の創造のための実験と研究が、劇場での作業を中心に行われている。この拠点活動は、創造と研究の有機的な結びつきを目指しており、研究者やアーティスト、参加者にとって、舞台芸術あらたな可能性に触れる有意義な機会となっているといえる。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

平成31年度は、以下のように、事業を通じて本劇場の活動が持続的に発展したと認められる。

■劇場全体の質的向上

劇場スタッフを国内外の舞台芸術祭や研修会に派遣し、その調査報告会を都度開催している。また、当舞台芸術研究センター主任研究員や劇場スタッフ、有志の本学学生・大学院生が参加するゼミ形式の勉強会も定期的に開催し、劇場全体の質的向上に努めている。主任研究員と劇場スタッフによる運営会議を隔月で開催し、直近に開催した自主事業の振り返り、アンケート等で指摘される日常的な劇場運営の課題共有、今後の自主事業や次年度以降の取り組みを協議し、独自のPDCAサイクルを構築している。

なお、劇場運営には、経営の母体である学校法人瓜生山学園京都造形芸術大学（令和2年4月より京都芸術大学に改名）の大学職員と、委託スタッフ、臨時職員が携わっているほか、劇場管理とチケット・友の会業務はそれぞれ業務提携した業者が関わっている。大学職員は学内異動により年度内に1名が交代したほかは、業務委託も含め構成員は安定している。また、各専門にそった研修参加や資格取得を奨励し、劇場運営の更なる改善に活かしている。

■安定的な収益基盤と財源確保

本劇場は、学校法人瓜生山学園が所有する劇場である。本学は志願者数も毎年定員を上回り、安定した経営基盤を維持している。

（4）創造性であげた「共同利用・共同研究拠点」は、文部科学省から令和6年度までの認定を受けており、それに基づく私学事業団の経常経費特別補助金が、見込まれている（この補助金は、将来の公演事業に向けた研究・実験のための研究活動にあてられている）。

また、当舞台芸術研究センター主任研究員が立ち上げた研究プロジェクトは、文部科学省「科学研究費・基盤研究（A）」（平成29年度～令和1年度）の研究助成の対象となっている。なお令和2年度から4年度まで3カ年の助成が決定している。

■ネットワークの構築

（4）創造性にあげた京都国際舞台芸術祭をはじめとする地域のネットワークのほか、劇場開設以来培ってきた国内外のネットワークを生かし、協力公演も積極的に実施している。なお、新たに令和2年度から採択された文部科学省「科学研究費・基盤研究（A）」では「アジアの舞台芸術創造における国際的な「ラボラトリー機能」の実践的研究」をテーマに掲げており、アジア他国のアーティスト・研究者との協同企画を複数計画している。これら研究会を経た作品上演も今後視野にいれている。

■中長期的目標

当舞台芸術研究センターの運営会議では、令和3年の「劇場20周年」、令和9年の「大学設立50周年」に向けた企画が現在進行している。また、定期的な劇場メンテナンスのほか、長期劇場修繕計画（劇場機構、舞台、音響、照明）に基づき、毎年度定期的に修繕を行っている。